福岡市埋蔵文化財調査報告書第822集

比　恵　36

—比恵遺跡群第80次調査報告書—

2004

福岡市教育委員会

巻頭写真．1　土器

巻頭写真．2　石器、土器

巻頭写真．3　木器

巻頭写真．比恵80次出土遺物

序

玄界灘に面して広がる福岡市には豊かな歴史と自然が多く残されており、これを保存・記録し後世に伝えていくことは現代に生きる我々の重要な務めであります。

福岡市教育委員会では近年の都市部周辺における開発事業の増加に伴い、建設工事などによって止むを得ず失われていく埋蔵文化財の発掘調査を実施し、失われていく遺跡の記録保存に努めているところであります。

本書は、比恵遺跡群第80次調査の成果を報告するものであります。本調査では弥生時代の集落遺跡の一部を調査し、比恵遺跡群の全容を知る上での多くの貴重な成果をあげることができました。

本書が、市民の皆様の文化財保護に対する理解を深めていく上で活用されると共に、学術研究の分野でも貢献できれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から本書の刊行に至るまで、費用負担をはじめとする御協力を賜りました山下保幸様をはじめ、多くの方々のご協力とご理解に対し、心からの謝意を表します。

平成16年３月31日

福岡市教育委員会
教育長　生田　征生

例　　言

1．本書は、博多区博多駅南３丁目50番地おける共同住宅建設工事に先立って、福岡市区教育委員会が平成14年度（2002年度）に実施した比恵遺跡群第80次調査の発掘調査報告書である。
2．本書の執筆・編集には本田浩二郎があたった。
3．本書に使用した遺構実測図・遺物実測図は本田が作成し、製図した。
4．本調査で出土した石器類については、福岡市教育委員会埋蔵文化財課吉留秀敏が石材・器種の鑑定・分類を行い、分類表を作成した。
5．本書の遺構実測図中に用いている方位は、すべて磁北である。
　なお遺物実測図の縮尺は土器類・土製品を1/2・1/3に、石器類を1/2、木器・木製品を1/2・1/4に統一した。
6．本書で使用した写真は本田が撮影した。
7．本調査に関わる記録・遺物類は報告終了後、福岡市埋蔵文化財センターにおいて収蔵・管理・公開される予定であるので、活用されたい。

本文目次

1．はじめに
（一）調査にいたる経緯……1
（二）調査体制……1

2．発掘調査の記録
（一）調査の概要……2
（二）基本層序……3
（三）出土遺物……7

3．まとめ……23

表紙　　出土遺物　木器
裏表紙　　出土遺物　木器

1．はじめに

（一）調査にいたる経緯

平成14年５月21日、山下保幸氏より福岡市教育委員会埋蔵文化財課に対して、博多区博多駅南３丁目50番地における共同住宅建設予定地内に関しての埋蔵文化財事前審査願が提出された。

申請地は周知の遺跡である比恵遺跡群の北端部に位置しており、申請地の周辺では数次の発掘調査が行われている。申請地には以前倉庫が建てられており、この建設工事着手以前の平成５年10月に試掘調査が行われていた。試掘調査の結果では、現地表面から150cmほど掘り下げた黒褐色粘質土層面上において弥生時代に属する遺物の存在が確認されていたが、建設工事に伴う遺構面への影響はなく調査は行われていなかった。今回の開発は高層共同住宅建設であり、建物工事に伴う基礎工事によって遺跡の破壊は免れないため、工事によって止むを得ず破壊される部分については全面に発掘調査を行い、記録保存を図ることとなった。発掘調査は福岡市教育委員会埋蔵文化財課がこれを行うこととなり、平成14年９月24日に着手し、同年11月22日に終了した。

（二）調査体制

調査委託				山下　保幸
調査主体	福岡市教育委員会	教育長		生田　征生
調査総括	同	埋蔵文化財課	課長	山崎　純男
	同	埋蔵文化財課	第２係長	田中　寿夫
調査庶務	同	文化財整備課		御手洗　清
調査担当	同	埋蔵文化財課	事前審査係	大塚　紀宜
				田上　勇一郎（試掘調査）
			第２係	本田　浩二郎（本調査）

調査作業	阿部　幸子	池　聖子	大音　輝子	小池　温子
	小路丸嘉人	小路丸良江	永田　優子	永田　律子
	夏秋　弘子	寺園恵美子	増田ゆかり	吉川　暢子
整理作業	有島　美江	室　以佐子	鳥尾　安子	

遺跡調査番号	０２３５	遺跡略号	ＨＩＥ８０
調査地地番	博多区博多駅南３丁目50	分布地図番号	37　東光寺
開発面積	376.73㎡	調査面積	206.25㎡
調査期間	2002．９．24～2002．11．22		

なお、調査期間中には上村建設株式会社の皆様には多くの配慮を賜った。記して感謝申し上げる次第である。

2．発掘調査の記録

（一）調査の概要

比恵遺跡群は、福岡平野の中央部近くに位置しており、那珂川と御笠川に挟まれた洪積丘陵の北端部に位置している。比恵遺跡群の南側には那珂遺跡群が存在しているが、両遺跡は検出される遺構・遺物より一連の遺跡と考えられ、その分布範囲は南北2.4㎞×東西0.8㎞の範囲が復元・推定されている。比恵遺跡群・那珂遺跡群では、それぞれ80次以上の発掘調査が現在までに行われている。

今回報告を行う、比恵遺跡群第80次調査地点は遺跡範囲の北端部に位置しており、調査区の現状は倉庫・宅地であった。試掘調査では現地表面から140cmほど掘り下げた暗灰褐色粘質土層面上で土器・木片などの遺物が検出されていた。調査着手以前に、試掘成果に基づいて現代の整地層を調査区外に搬出し、調査区南側から重機による表土掘削を開始した。調査地点の現地表面の標高は5.20m前後を測る。

検出遺構

第80次調査地点は弥生時代に埋没した谷の内部に位置していることが周辺の調査から判明していた。調査地点南側には第25次調査地点や第32次調査地点、第68次調査地点などがあり、谷地形の縁緩斜面上に弥生時代に属する竪穴住居・貯蔵穴などの遺構が検出されていた。第32次調査地点付近では大量の木製品などの有機質の遺物が出土しており、谷内部に位置する本調査地点でもこのような木製品などが良好に遺存しているものと考えられた。谷内部という地形的要因から遺構の検出は皆無と考えられ、調査は包含層の掘り下げ・遺物の検出を主たる目的として行った。調査は掘り下げ時の排土処理を場内で行うことから、南北２カ所に分けて行い、包含層の掘り下げは１区～６区のグリッドを設定して行った。

調査作業は現地表面から1.4ｍほど掘り下げた黒褐色粘質土層面内に包含される遺物を検出することから開始した。比恵・那珂遺跡群の遺構検出面となる鳥栖ローム層は、谷の内部であることから雨水などにより開析され流失してしまったと考えられ調査地点内では検出されず、鳥栖ローム層下に堆積する八女粘土層を基盤層として掘り下げを行った。掘り下げは調査区内の堆積状況を観察・把握するために、土層観察用のベルトを残して行い、観察・図化後にはベルト内の遺物の検出・取り上げ・除去を行い完掘とした。

弥生時代の遺物を包含する暗褐色粘質土層面上には、周辺の調査成果より古代の時期と考えられている黒褐色粘質土層の水田面と黄褐色粘質土層の水田床土が堆積する。包含層掘り下げ前に遺構検出を行ったが、調査区内では畦畔などの施設は検出されず、水田一枚の規模や区画などは不明確である。調査着手以前に予想されていた弥生時代の谷水田に関連する遺構の検出はなかった。

遺物は弥生土器・石器・木器・木製品などがコンテナケースで16箱分出土した。弥生土器は前期に属するものがほとんどであるが破片で出土したものが多く、完形復元できる個体は出土しなかった。石器は石斧・石包丁や黒曜石石核などがコンテナケース１箱分が出土した。石斧・石包丁には破損・欠損したものが多く、破損のため廃棄されたものであることがわかる。

木器・木製品は三又鋤・平鍬・三又鍬・柱材・杭・建築部材・用途不明品などが出土したが、完存するものはなく、いずれも破損・欠損している。

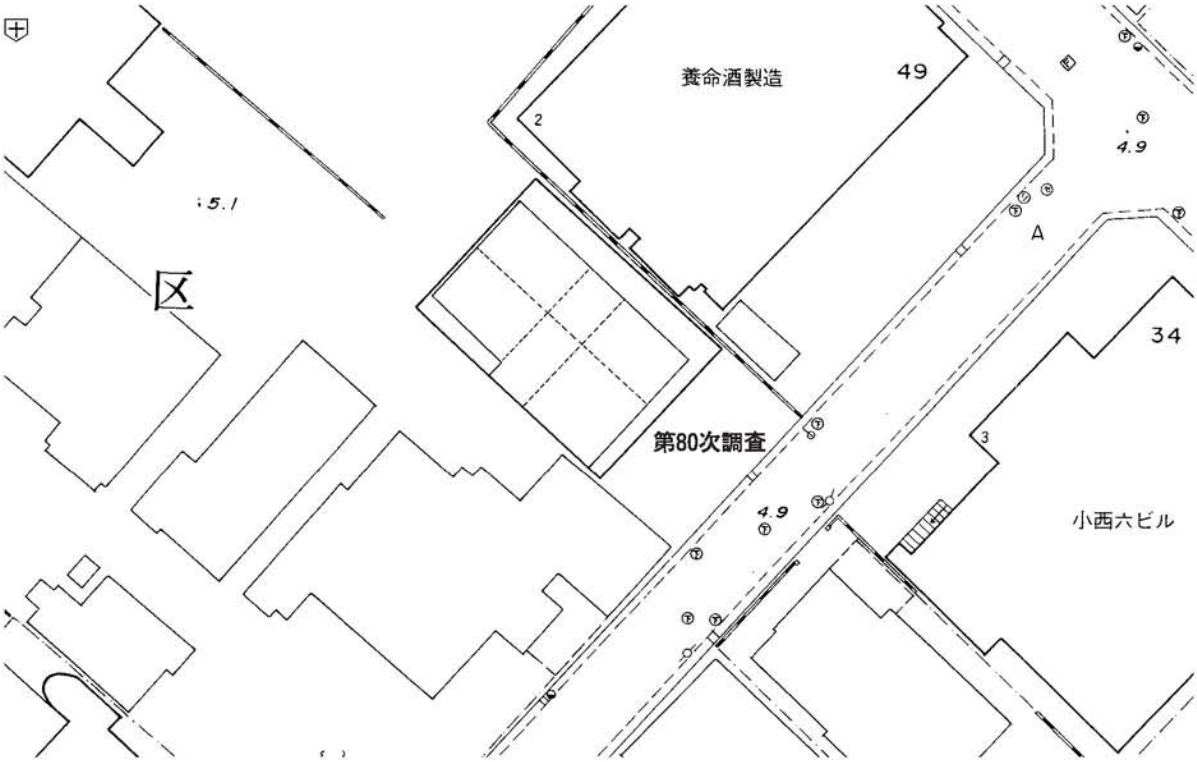


Fig. 1　調査区位置図（S＝1/500）

（二）基本層序（Fig. 4）

第80次調査地点は比恵遺跡群が立地する丘陵の北端部に位置している。比恵遺跡群は標高５～11m前後の洪積丘陵上に位置しており、丘陵北側には北側に開く谷地形が点在する。現在は谷地形は完全に埋没し宅地化され、旧状を留めていないが、周辺は現地表面の観察からも北側に緩く傾斜している様子が観察できる。調査区の現地表面の標高は5.20m前後を測る。試掘調査に成果を基に重機によって標高3.65m前後まで堆積する現代までの整地層を除去した後に掘り下げを行っている。基盤層とした八女粘土層（６層）は谷が開く北側に向けて緩く傾斜し、調査区内での比高差は10cm前後を測るが、ほぼ平坦に堆積しており急激な落ちなどは見られなかった。

調査区内の土層は基本的に１～６層に分層される。調査を開始した１層の暗褐色粘質土層面は調査区全面に５～10cm前後の厚さで堆積しており、粗砂・シルトを多く含み、部分的に粗砂層が被る。下層には２層とした暗褐色粘質土層が堆積する。１層に比べ粗砂の混入は少なく、調査区北側では薄くなり５cm以下、谷頭方向の南側では30cm前後の厚さで堆積する。

３層には暗灰褐色粘質土層が堆積する。調査区全体に堆積する安定した層位で、部分的に粗砂層・シルト層が堆積する。掘り下げ時には少量であるが、弥生土器片・石器・木器・木製品などが出土した。

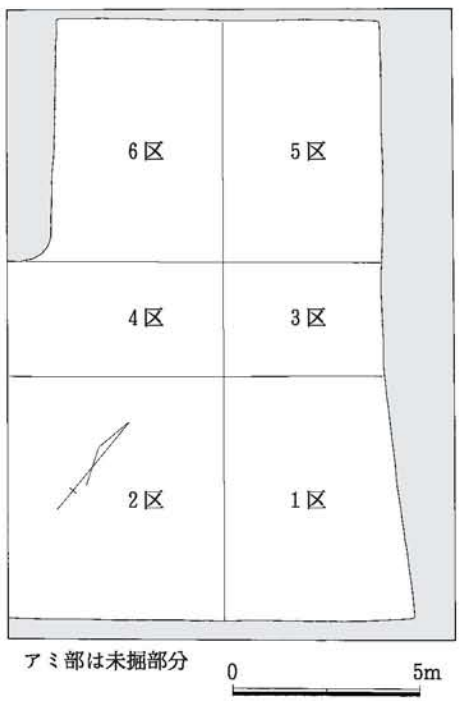


Fig. 2　調査区配置図（S＝1/200）

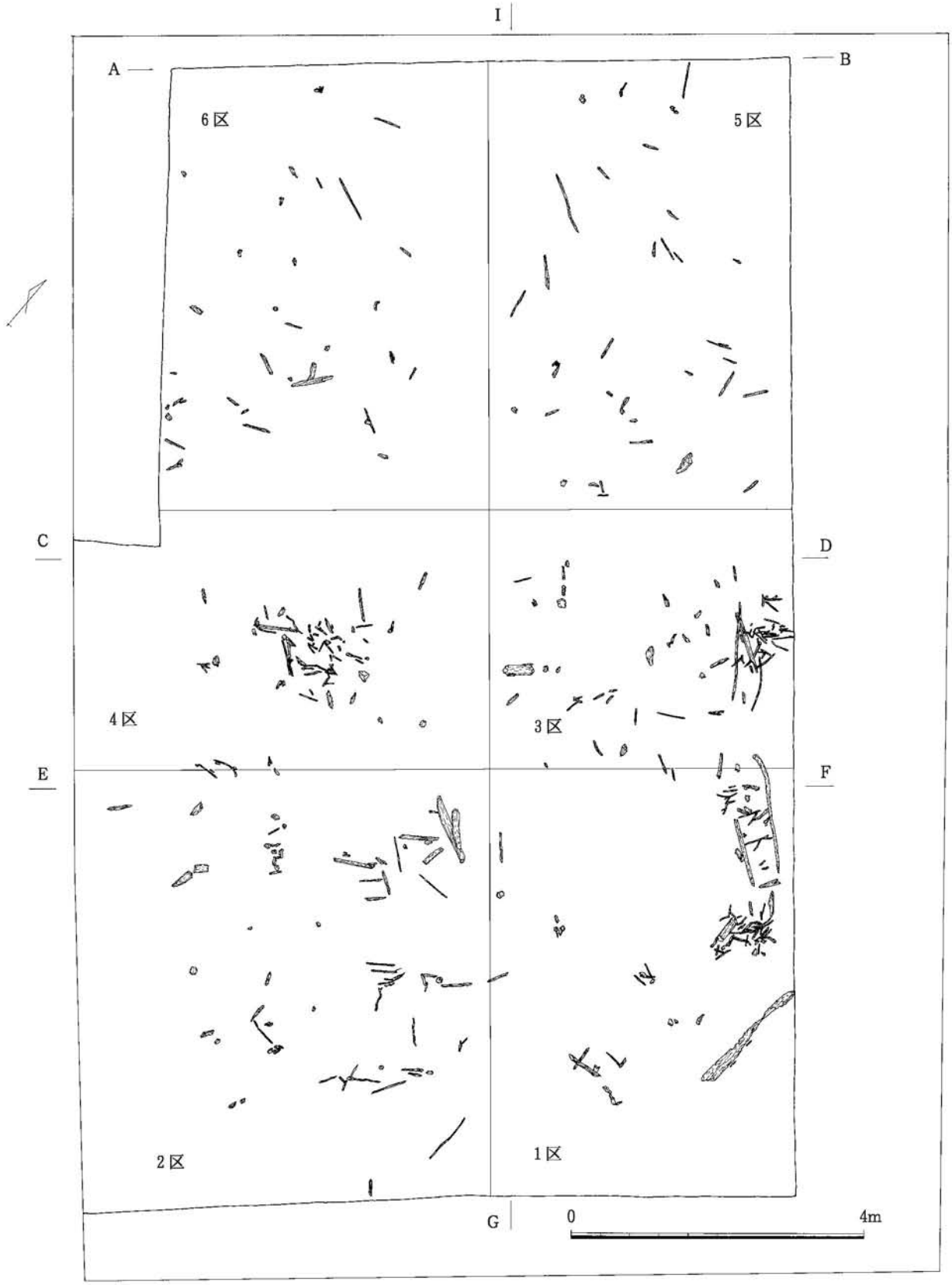
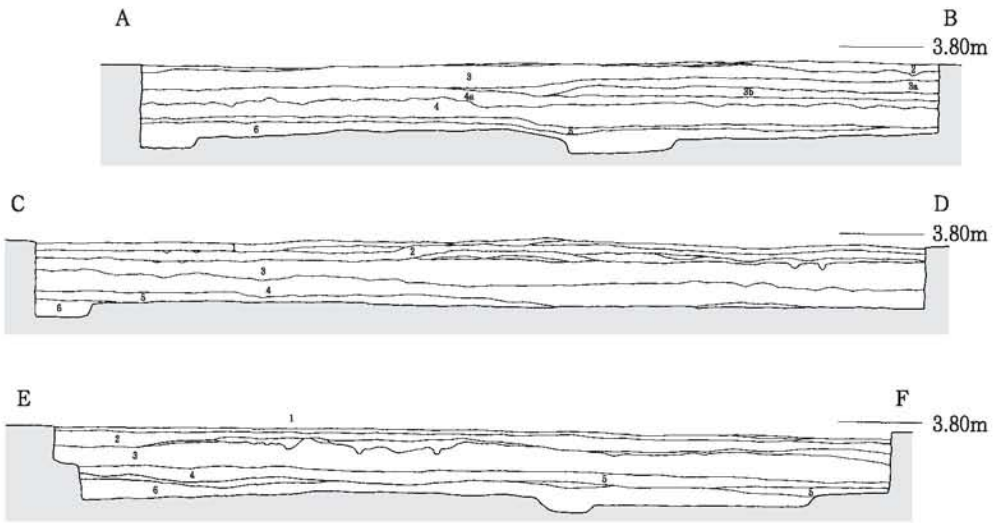
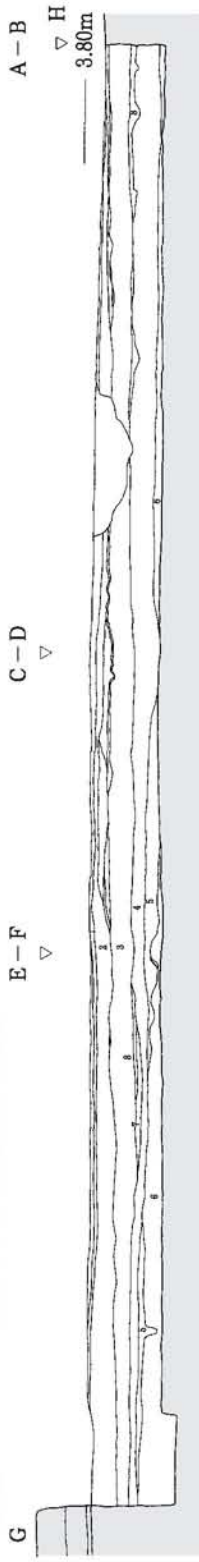


Fig. 3　調査区全体図（S＝1/80）





比恵80次土層注記

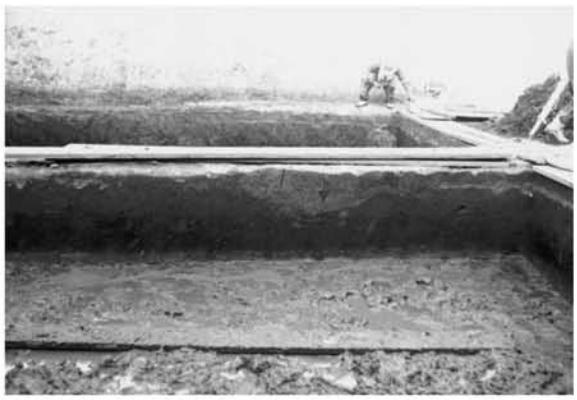
1	暗褐色粘質土（粗砂・シルト混入）	4 a	暗灰色粘質土（木片・遺物）
2	暗褐色粘質土（粗砂混入）	5	暗灰褐色粘質土（木片混入）
3	暗灰褐色粘質土	6	八女粘土層（基盤層）
3 a	暗青灰色粘質土（粗砂混入）	7	青灰色シルト
3 b	暗黒灰色粘質土（粗砂・木片混入）	8	褐色粗砂
4	黒色粘質土（遺物包含層）		

Fig. 4　調査区土層図（S＝1/80）

Ph. 1　調査区土層断面（南西から）

Ph. 2　調査区土層断面（西から）

Ph. 3　調査区土層断面（南西から）



Ph. 4　調査区土層断面（南東から）

3 a層とした暗青灰色粘質土と3 b層とした暗黒灰色粘質土層は調査区北側のみで観察できる土層で、谷頭方向である南側では観察されない。

4層とした黒色粘質土層は大量の流木片に混じって弥生土器・石器・木器が出土する。調査区全面に堆積するが、南側方向に厚く堆積する層位で、南側では厚さ25cm前後を測る。粗砂・シルト層が部分的に堆積し、水田面の可能性も考えられたが、足跡・稲株の痕跡やこれに伴う畦畔などの遺構の検出がなく水田面とは判断できなかった。4 a層とした暗灰色粘質土層も調査区北側のみで観察できる土層である。5層とした暗灰褐色粘質土層は主に調査区南側で検出される層位で、北側では部分的にしか堆積していない。

層位の堆積状況の観察から調査区一帯は谷底面中央部の平坦面上に位置し、比較的安定した環境であったことが伺える。

Ph. 5　1区遺物出土状況（南東から）

Ph. 6　2区遺物出土状況（南東から）

Ph. 7　3区遺物出土状況（北東から）

Ph. 8　4区遺物出土状況（南西から）

Ph. 9　5区遺物出土状況（東から）

Ph. 10　6区遺物出土状況（北から）

（三）出土遺物

前述のように、調査ではコンテナケース16箱分の弥生土器・石器・木器などの遺物が出土した。出土状況からこれらの遺物は調査区に直接廃棄されたものではなく、谷落ち際の汀線付近に廃棄された遺物が谷中央部に位置する本調査区付近に雨水などによって土砂と共に移動し、水生植物などに絡まって埋没したものと考えられる。出土した遺物はいずれも破損・欠損しており、谷内部が周辺集落の廃棄場所として選定されていたことが伺える。遺物の出土位置・出土層位は図中に示した。

a．弥生土器（Fig. 8 ～11）

1 ～51は頸部または胴部片である。1・2は二条以上の沈線文を施し、上位または下位に羽状文を施す。3は壺頸部片で平行沈線文を施す。4・5・6は壺肩部片で、沈線文と羽状文の一部が残る。

7は壺胴部片で、頸部直下に沈線文が施され、体部には重弧文が施される。8は貝殻腹縁部による羽状文が施される。9は沈線文下に格子状に羽状文が残る。10は壺頸部下に刻み目を巡らす。12～14は斜め方向の刷毛目調整の後に沈線文を施す。15は壺肩部片で、段を設け上位には平行するヘラ磨きを施し、下位に羽状文を施す。16は壺肩部片で平行沈線文が施される。17も壺肩部片で、沈線文下に重弧文が残る。21は二条の突帯が残る頸部片で、突帯は断面形が台形を呈する。22は刷毛目調整に重複するように沈線文が残る。25は壺頸部片で、頸部に段を持ち、段下に羽状文を施す。

26は沈線文上位に調整具側面を押し当てて浅い羽状文を施す。27は連続する羽状文を施す。

28は壺胴部片で、断面形方形の突帯を持つ。突帯上には竹管文を施す。突帯貼り付け後に刷毛目調整を施す。29は壺肩部片である。平行沈線文で文様帯を画し、貝殻腹縁部による羽状文を施す。
30は平行沈線文下に山形文を持つ。31は浅く幅の広い線刻による羽状文を持つ。33は壺胴部下半で、横位のヘラ磨きを施す。34は重弧文の一部が残る。36は幅の広い原体による刷毛目調整が施された後に浅い沈線が施される。37は壺頸部片で四条の沈線文が巡る。38は沈線文下に格子文を施す。40は壺肩部片で、沈線文上位に幅広の羽状文を施す。42～45には羽状文が残る。

46・47は壺肩部片で、重弧文の一部が残る。47は重弧文末端を画する沈線文が施されていない。

48は壺頸部片で、頸部に断面形が三角形の突帯を設ける。突帯下には羽状文が施される。51は壺肩部片で、文様帯を沈線文で画し貝殻腹縁部による羽状文を施す。52は沈線文と羽状文が施される。

53は小甕口縁部片である。54は甕口縁部片である。如意形の口縁を呈し、端部に刻み目を施す。55～64は甕である。55～58は逆L字形の口縁部を持ち、57の口縁端部には刻み目が残る。器面調整は刷毛目調整されるものが多い。59～67は口縁部が如意形を呈するものが多い。59は跳上口縁を持ち、刻み目が施される。65～67は壺口縁部片である。65は緩く開く口縁部を持ち、外器面にはヘラ磨き、内

Ph. 11　遺物出土状況（北西から）

Ph. 12　遺物出土状況（北から）

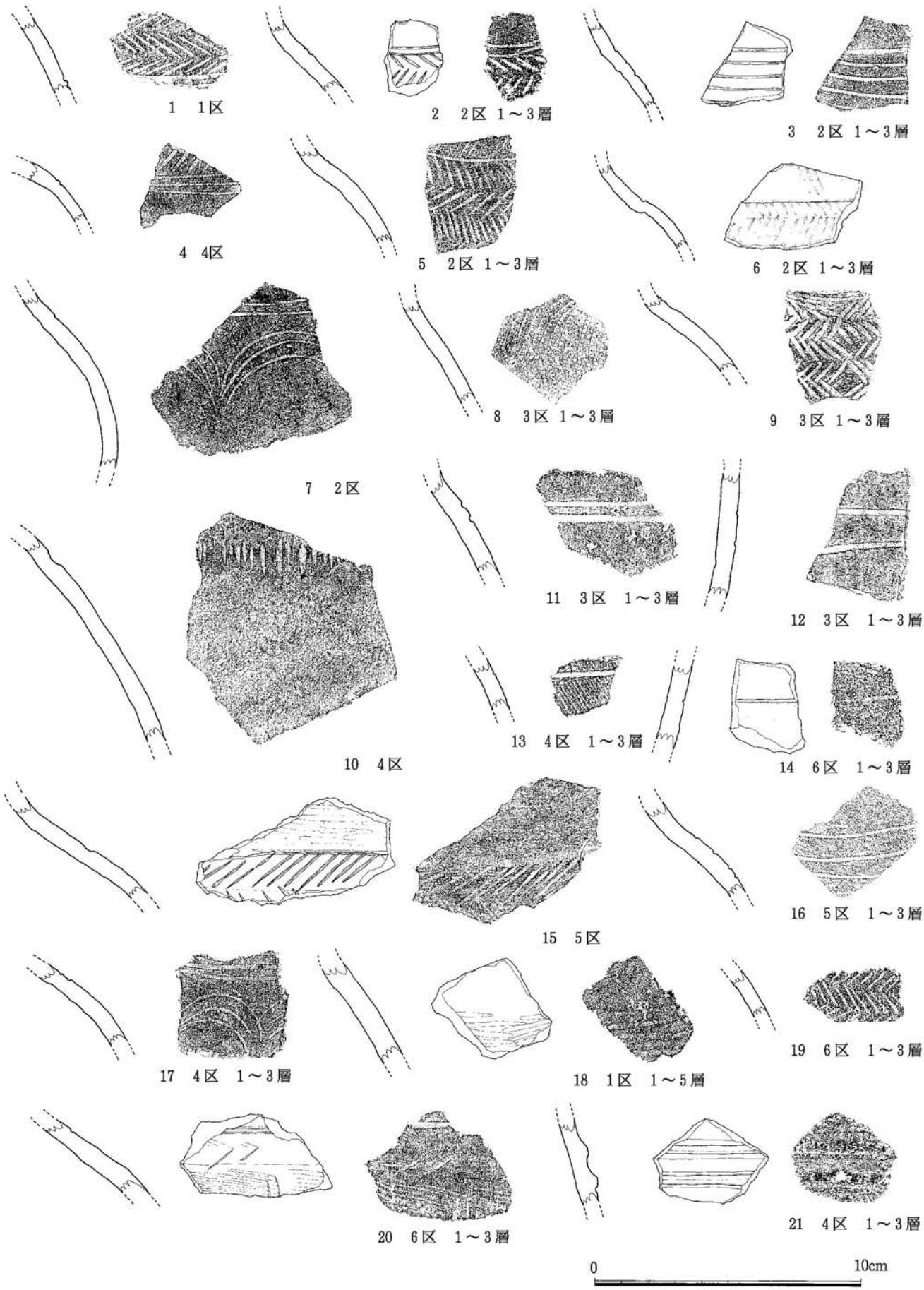


Fig. 5　出土遺物実測図1（S＝1/2）

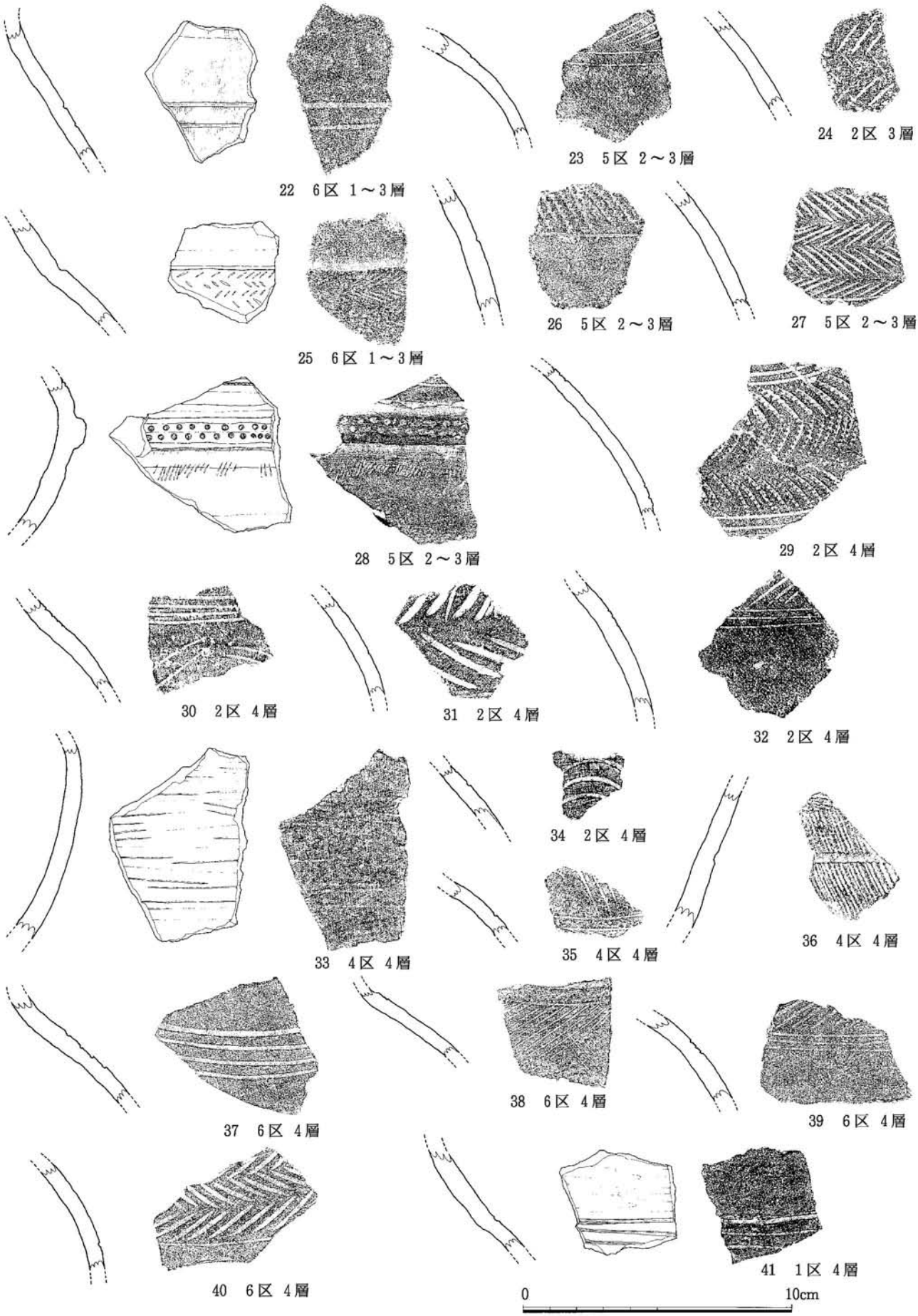


Fig. 6　出土遺物実測図2（S＝1/2）

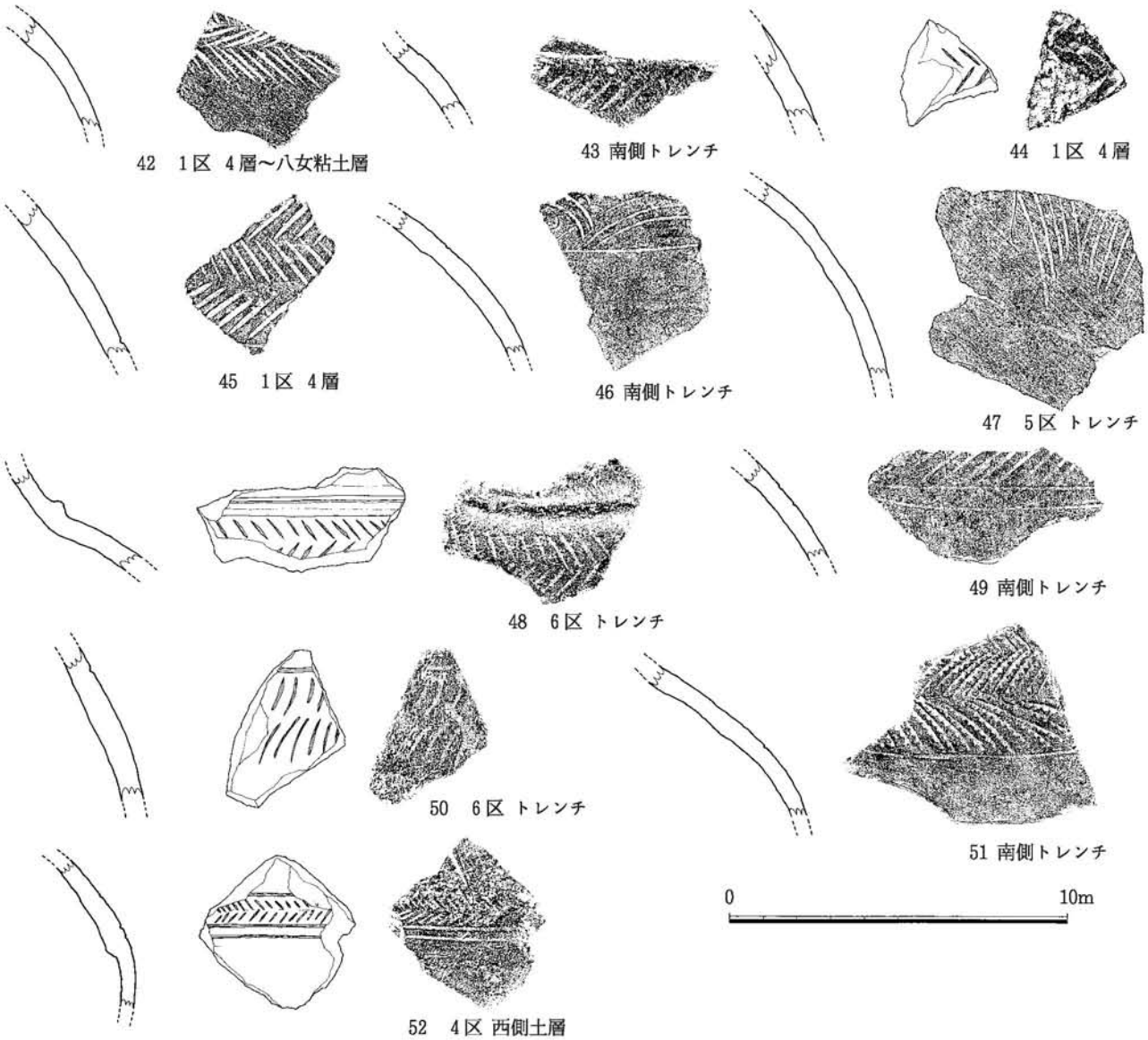


Fig. 7　出土遺物実測図３（S＝1/2）

器面は刷毛目調整が施される。66は口縁端部に刻み目を持つ。68は壺胴部片である。羽状文が残る。69は広口壺の口縁部片である。口縁端部に刻み目を持つ。70は甕口縁部片である。口縁部に突帯を持つが、接合面から剥離する。71・72は壺頸部片である。71は断面形三角形の突帯を持ち、突帯上には刻み目が施される。72は平行沈線文が施され、体部はヘラ磨きで調整される。

73～75・78は甕である。74・75は口縁部下に突帯を巡らす。76・77は鉢か。77は如意形の口縁を持ち、端部に刻み目が施される。79は広口壺の口縁部である。口縁端部に刻み目を持つ。

80～84は甕である。口縁部は逆Ｌ字形を呈し、80は刻み目を施す突帯が巡る。体部は刷毛目調整されるものが多い。85～91・93～95は甕である。口縁は如意形を呈し、端部には刻み目が施されるものが多い。92は広口壺口縁部である。口縁端部の上下に刻み目を施す。96～111は甕底部片である。器面調整は刷毛目調整が施されるものが多い。96・102はヘラ磨きが施される。

112～114は甕口縁部片である。口縁は逆Ｌ字形を呈する。115～117は壺底部片である。ヘラ磨きが

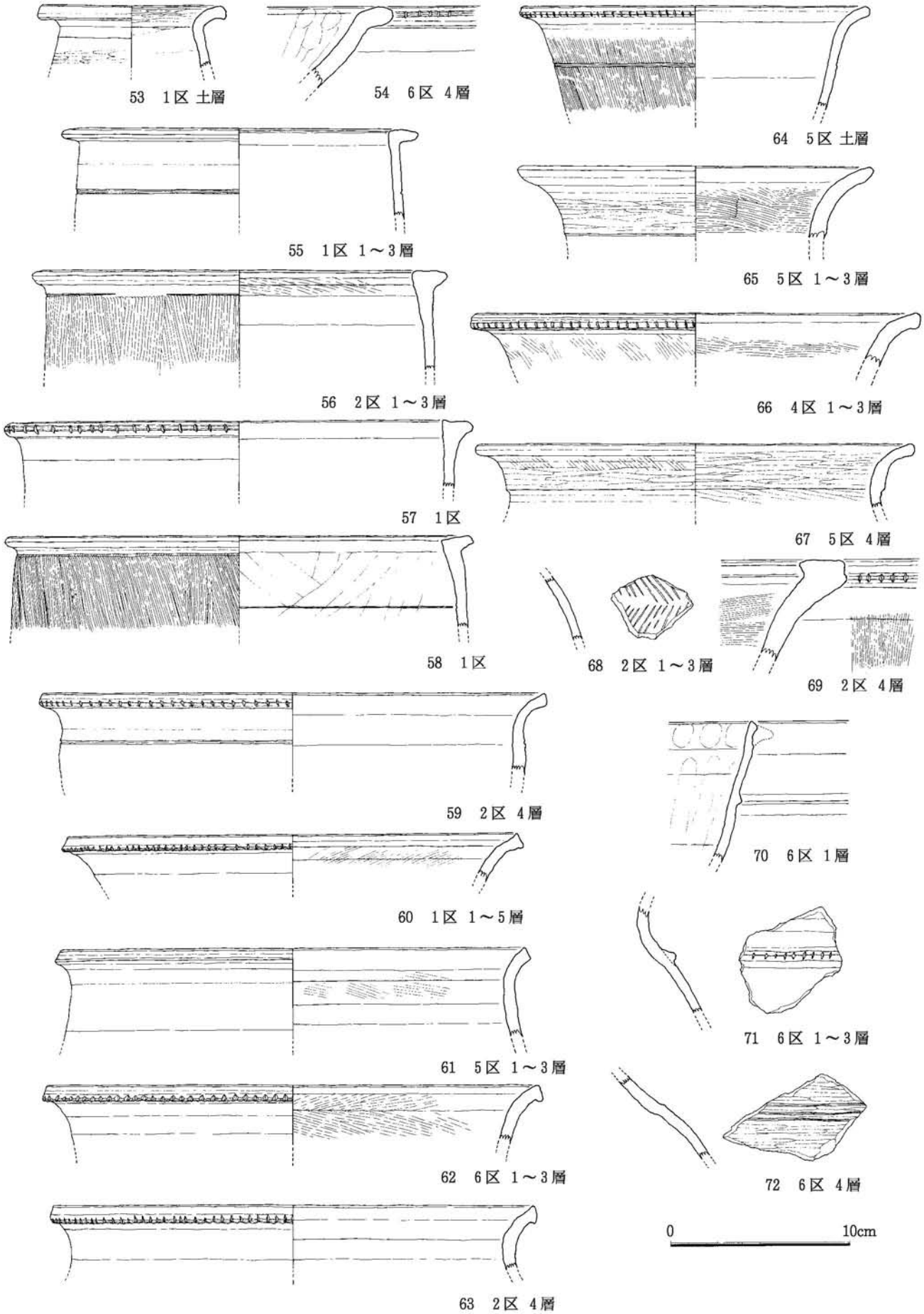


Fig. 8　出土遺物実測図4（S＝1/3）

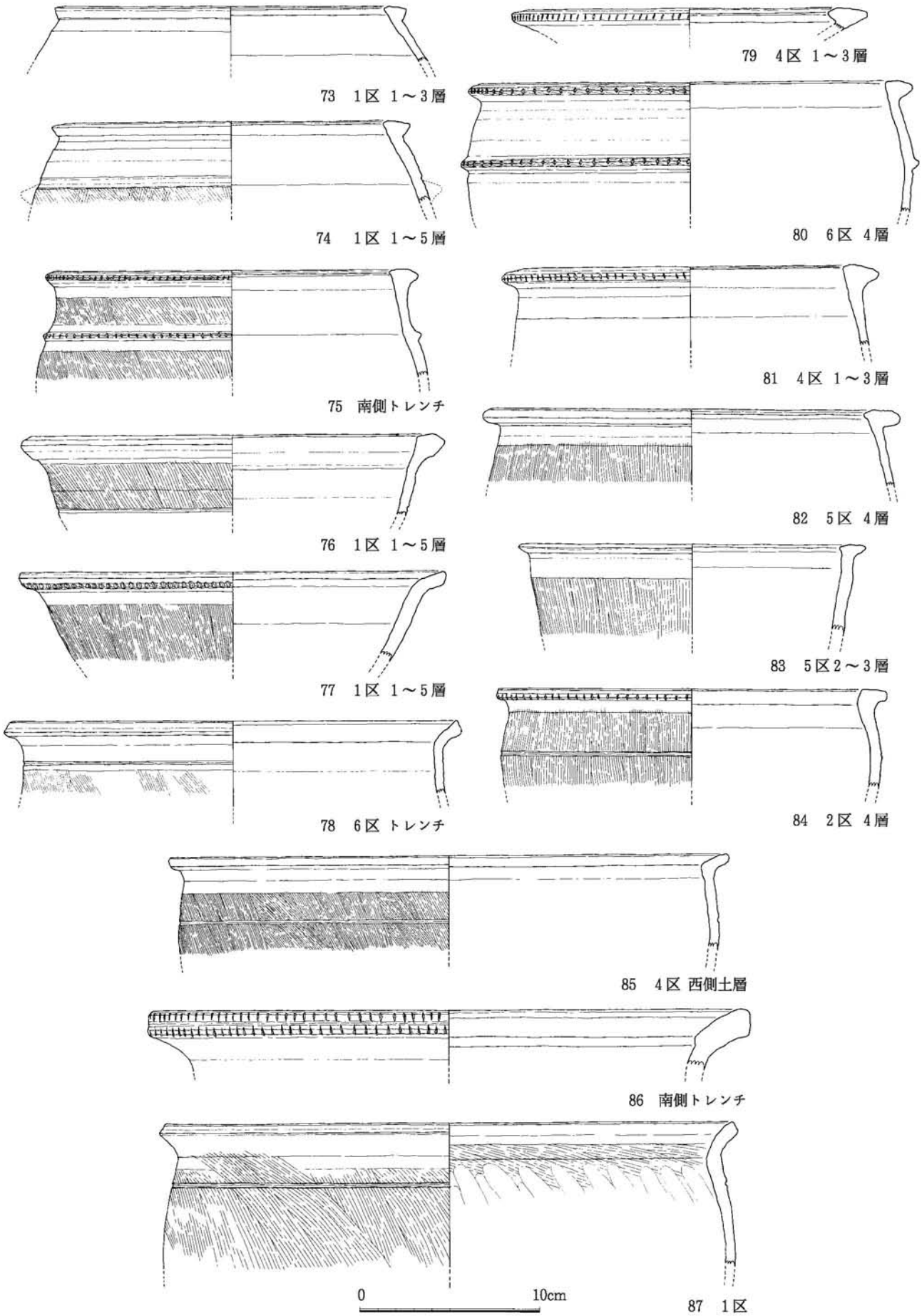


Fig. 9　出土遺物実測図5（S＝1/3）

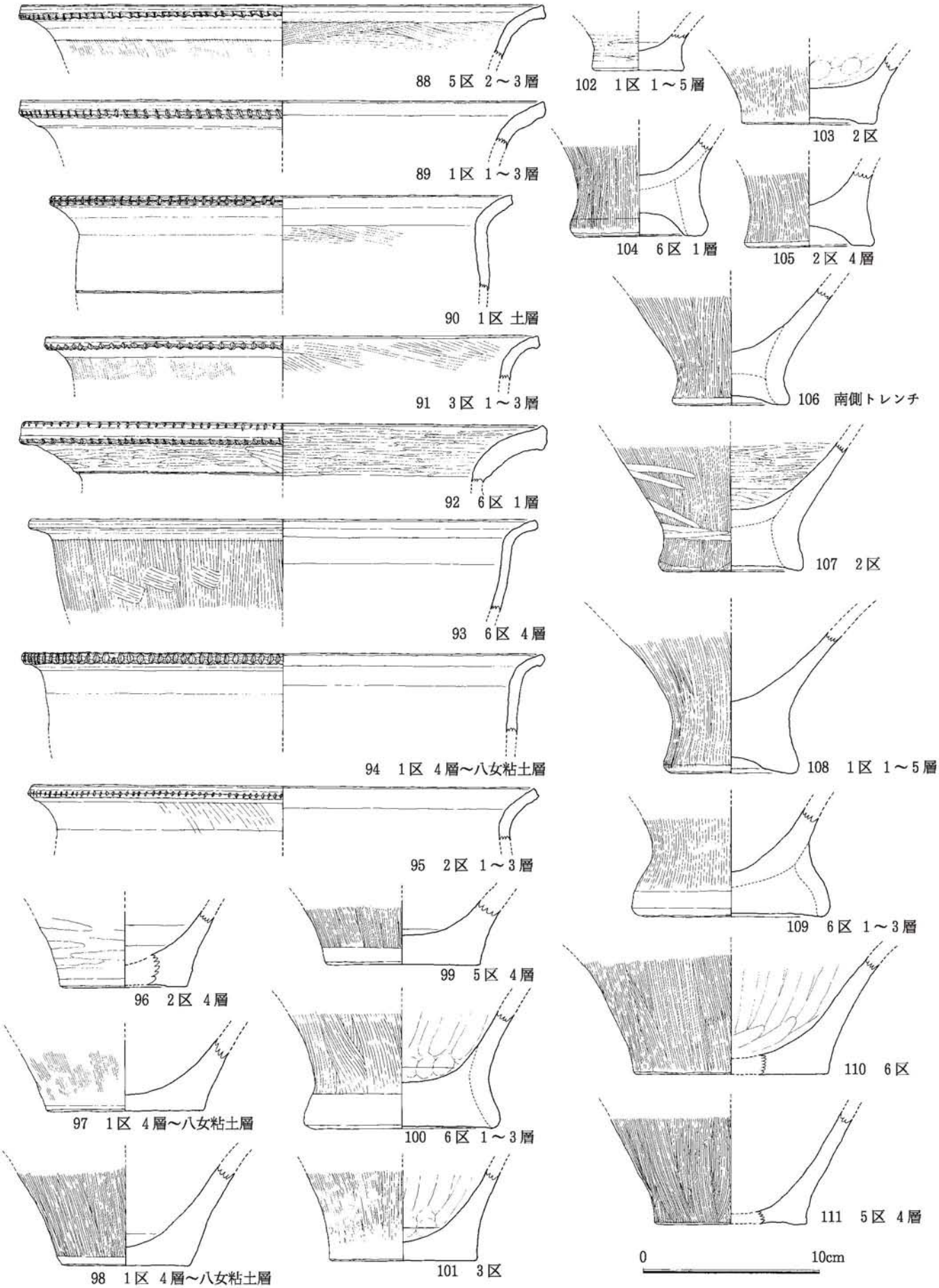


Fig. 10　出土遺物実測図 6 （S＝1/3）

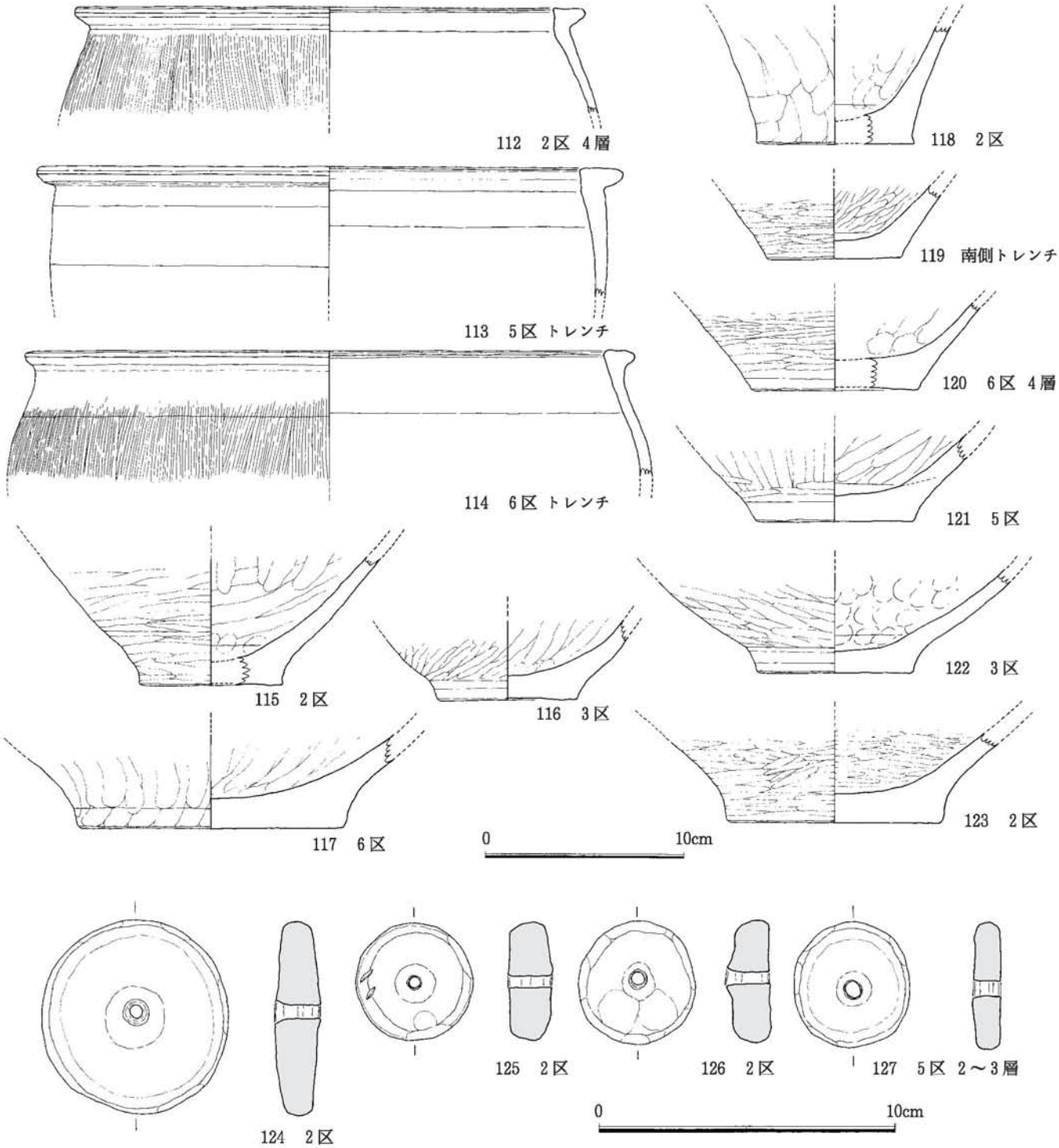


Fig. 11　出土遺物実測図 7（S＝1/2・1/3）

施される。118は甕底部片である。ヘラナデ調整される。119～123は壺底部片である。

124～127は土製の紡錘車である。124は直径6.5cm前後を測り、器厚1.1～1.5cmを測る。125は直径4.0cm、器厚1.4cm前後を測る。126・127は直径4.0～4.3cmを測り、器厚は0.9～1.5cmを測る。焼成はいずれも良好で、色調は褐色～暗褐色を呈する。

b．石器（Fig.12～14）

石器は黒曜石製の剥片石器・石核・原石や石斧・石包丁・叩き石などが出土した。

128は黒曜石製の剥片石器で、上面の一部に自然面を残し、側面に刃部を形成する。重量は6.89ｇを測る。129はスクレイパーである。粘板岩系の石材を使用しており、背面に自然面を残す。重量は16.41ｇを測る。130は黒曜石製の剥片石器である。上面に自然面を残し、重量は7.17ｇを測る。

131は黒曜石石核である。熱破砕による剥離痕が全面に残る。重量は15.83ｇを測る。132～134は黒曜石原石である。132・133は多孔質の黒曜石で、腰岳系黒曜石と見られる。試打痕と見られる剥離面が観察できる。重量は20.19ｇ、21.46ｇを測る。134は全体が著しく風化しているが、試打痕と見られる風化のあまり進んでいない剥離痕が観察できる。腰岳系の多孔質な黒曜石で、端部では崩壊が進んでいる。重量は116.0ｇを測る。

135はサヌカイト製の石核である。重量は48.74ｇを測る。136は腰岳産黒曜石製の石核である。試打痕と見られる小さな剥離が見られる。重量は77.36ｇを測る。137は片刃石斧片で、抉り部の一部が残る。残存する面には研磨痕が明瞭に残る。重量は15.18ｇを測る。

138は砥石である。端部が欠損しているが、研磨作業の使用痕が残る平坦面が観察できる。重量41.86ｇを測る。139は砥石か。残存する面には研磨痕が残る。重量13.35ｇを測る。

140は頁岩製の石包丁の一部である。刃部には研磨痕が残り、重量23.85ｇを測る。141は石包丁の一部である。刃部の一部が残り、重量26.89ｇを測る。142は石斧未製品か。加工の際に破損したものと考えられる。重量は80.51ｇを測る。143は石斧基部の一部で砂岩系の石材を使用する。重量は46.89ｇを測る。144は滑石製の敲打器である。側面の全周に敲打痕が残る。重量は103.29ｇを測る。145は敲打器で断面形は楔形を呈する。先端部付近には敲打痕が集中して残る。重量159.35ｇを測る。146は石斧刃部の一部である。重量82.20ｇを測る。147は石斧未製品である。重量143.10ｇを測る。148は磨製石斧刃部の一部である。全面に研磨痕がよく残る。重量363.11ｇを測る。149は磨製石斧の一部である。丁寧に研磨され、稜を境に研磨方向が異なる。重量は72.57ｇを測る。出土した石器からは、近辺で最終的な石器製作作業を行っていたことが伺える。

		腰岳系黒曜石								腰岳以外			
						ツール							計
地点	層位	原石	石核	剥片	砕片	石鏃	スクレイパー	ユーズドフレーク	その他	剥片	砕片	石核	
1区	トレンチ			1									1
2区	1～3層			2									2
2区	4層			1									1
4区	1～3層		1										1
4区	4層		1										1
5区	1～3層											サヌカイト石核1	1
5区	2～3層	1											1
5区	2～3層			2									2
5区	壁			1									1
5区	トレンチ				1								1
6区	1～3層		1(熱破砕)	1									2
6区	4層									粘板岩スクレイパー1			1
6区	トレンチ				2								2
1区	土層トレンチ		2	1				1					4
													21

Tab.1　比恵遺跡群第80次調査出土石器一覧表

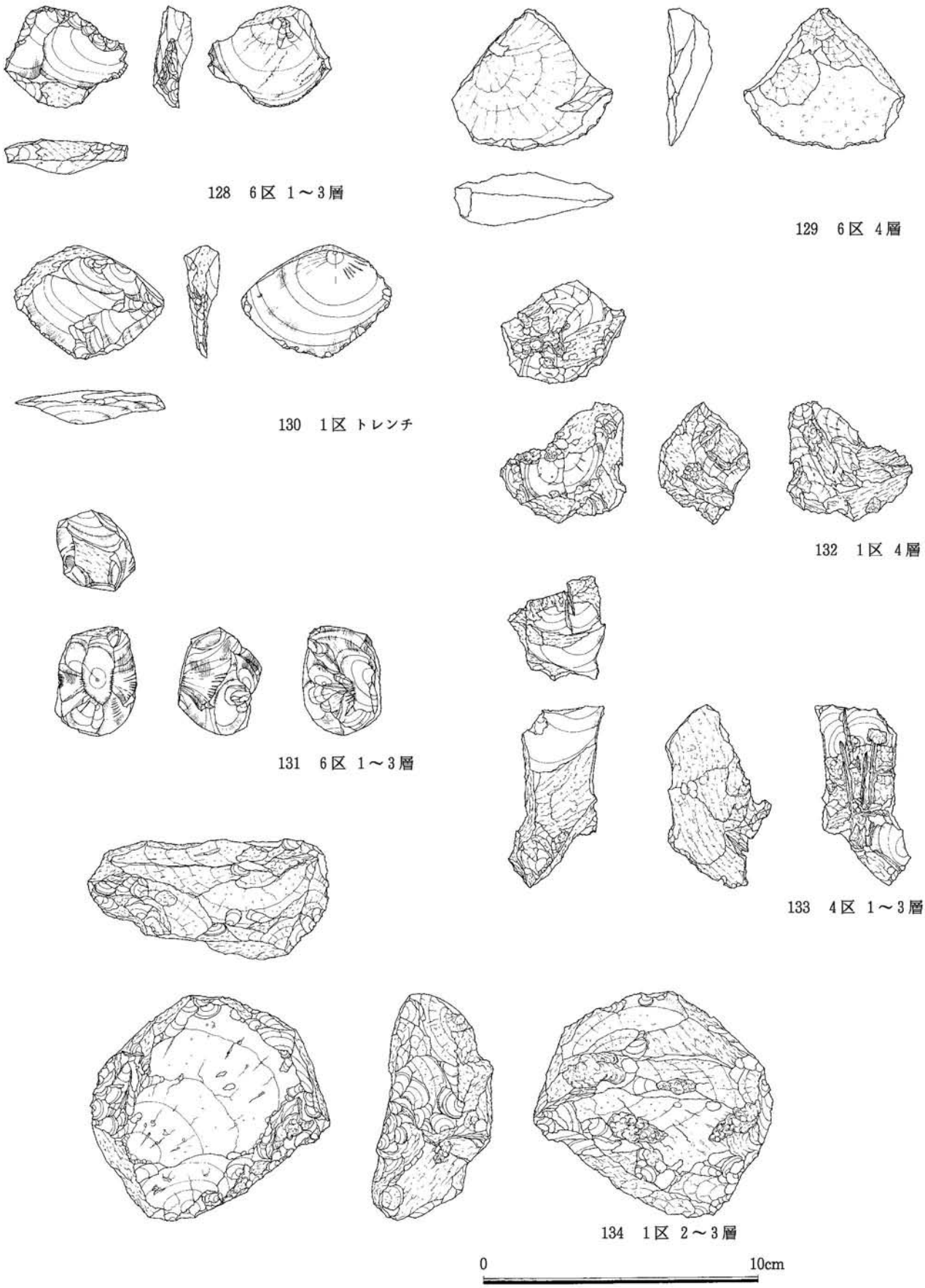


Fig. 12　出土遺物実測図 8 （S＝1/2）

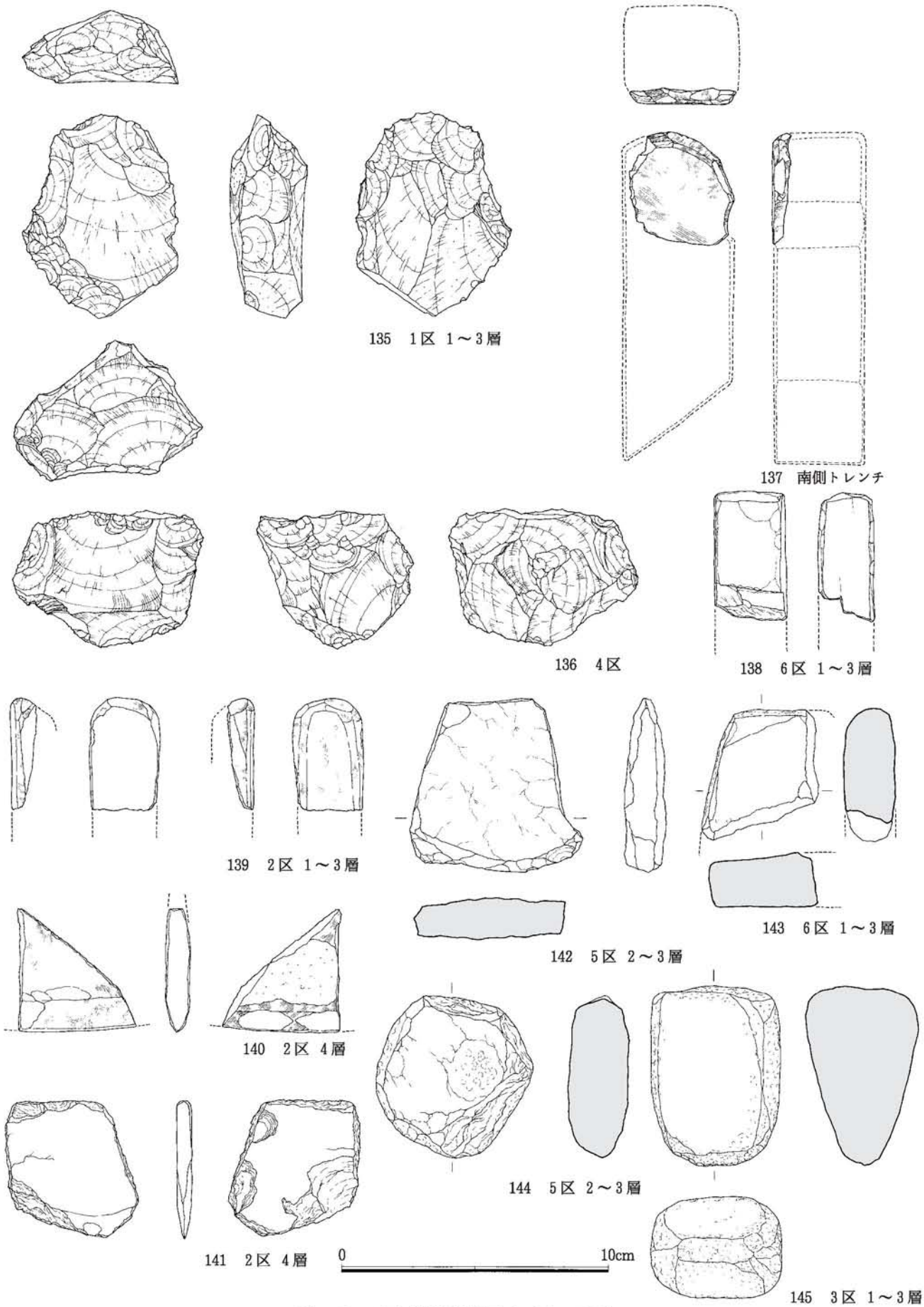


Fig. 13　出土遺物実測図 9 （S＝1/2）

146　6区　4層

148　4区

147　6区　4層

0　10cm

149　6区　4層

Fig. 14　出土遺物実測図10（S＝1/2）

Ph. 13　出土遺物

c．木器・木製品（Fig.15・16）

調査では植物遺物が出土し、このうち人為的な加工を施されたものは30点前後ある。未図化の木製品は杭などが多数を占めているが、方形孔のある板材や建築部材が出土した。これらの木製品は数カ所に集中して出土したが、枝などの大量の流木と折り重なるような状態であった。土層観察から廃棄された時期には調査区が低湿地状の帯水環境であったことが考えられ、汀線際に廃棄された遺物が淀みの中で水生植物に絡まり数カ所に集中したものと考えられる。

150は平鍬の一部である。円形着柄孔の一部が残り、柄との固定または補修用のために紐通し孔が穿孔されている。残存長19.2cm、残存幅9.8cm、器厚0.9cm前後を測る。

151は三又鋤である。柾目取り材を使用した一木造りで、先端部を含めた三又部が基部より欠損する。握り部は完存しており、握り部幅11.9cm、残存長56.6cmを測る。

152は三又鍬の一部である。先端部は残存しており、加工痕が明瞭に残る。残存長は23.2cmを測る。

153は鋤の柄部分の一部と考えられる。断面形は方形で、両端部が欠損する。残存長48.6cmを測る。

154・155は杭である。先端部には加工痕が残る。155は切断のためある程度切り込みを行った後に、折られている。断面形は多角形を呈し、幅５cm前後の単位で面取される。残存長は15.2cm、26.4cmを測り、直径は2.6～3.2cm、4.0～5.6cmを測る。156は柄の一部である。柾目取り材を使用し、断面形は楕円形に加工される。残存長は33.9cmを測る。

157は一辺６㎜前後の方形孔を持つ板状の加工材である。器面には弧を描くように加工痕が残る。残存長13.7cm、残存幅5.8cm、器厚0.6cm前後を測る。

158は板状の加工材である。残存長12.0cm、残存幅3.5cm、器厚0.6cm前後を測る。

159は平鍬または三又鍬の一部である。側面の一部のみが旧状を留める。残存長12.3cm、残存幅4.2

Ph. 14　木器出土状況１（西から）

Ph. 15　木器出土状況２（北東から）

Ph. 16　木器出土状況３（南東から）

Ph. 17　木器出土状況４（北西から）

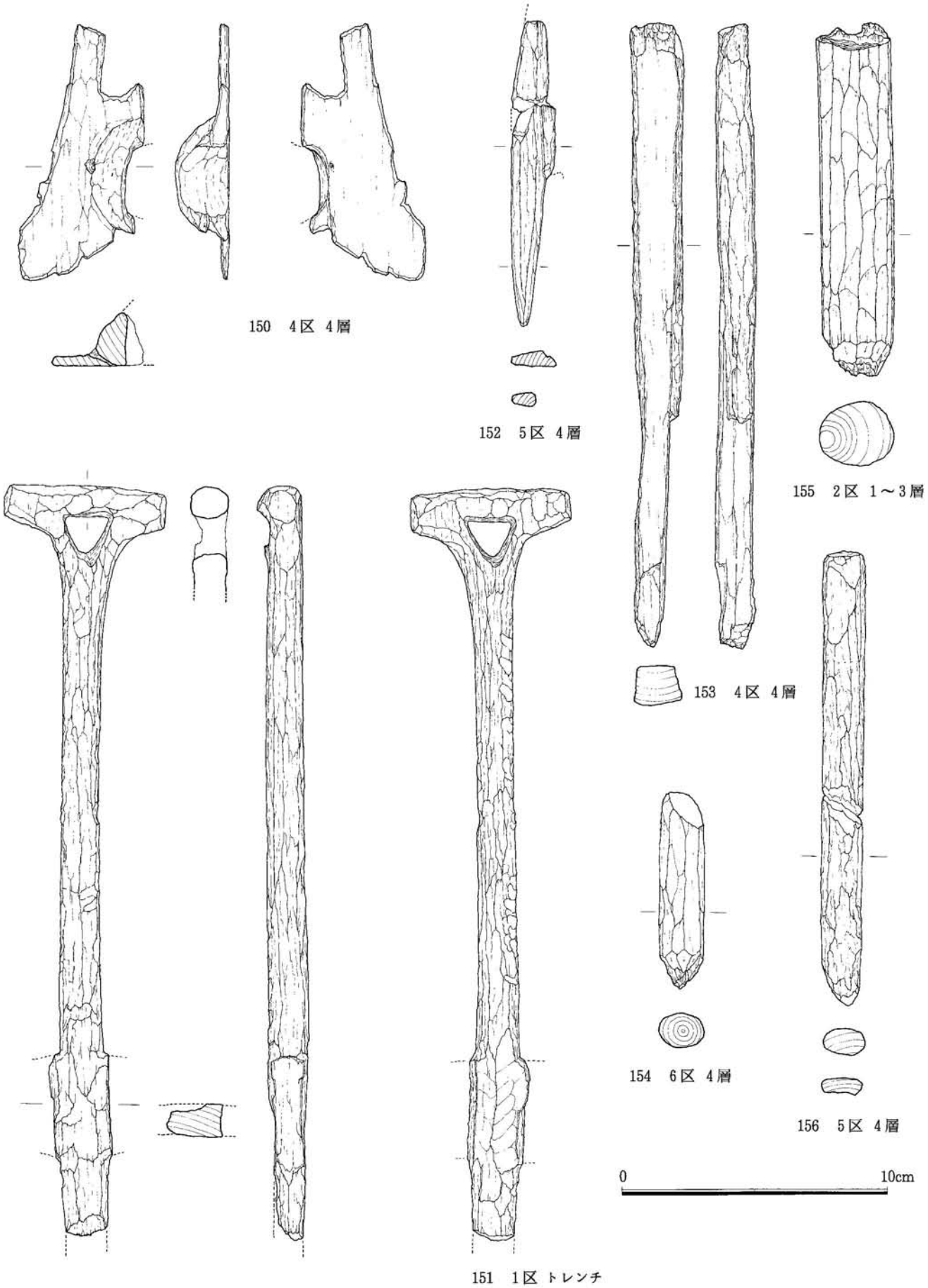


Fig. 15　出土遺物実測図11（S＝1/4）

cm、器厚0.6cm前後を測る。160は縄縛痕を持つ木製品である。両端部が欠損するため、本来の形状は不明である。残存長11.3cm、残存幅3.4cmを測る。

161は平鍬または三又鍬の一部である。側面の一部には調整痕を残し、補修用または固定用の紐通し孔が穿孔される。残存長11.7cm、残存幅4.0cm、器厚0.8cm前後を測る。

162は円形の紐通し孔を二カ所にもつ板状加工品である。残存長8.8cm、残存幅3.8cm、器厚0.7cm前後を測る。板目取り材を使用する。泥よけの一部か。

この他には残存長2.0m前後の杭が出土している。両端部を加工し尖らせたもので、中心部で直径5.0cm前後、両端部では直径3.0cm前後を測る。出土した木器は弥生時代前期頃に属するものであり、包含層が形成された時期もこれに近い時期が考えられる。

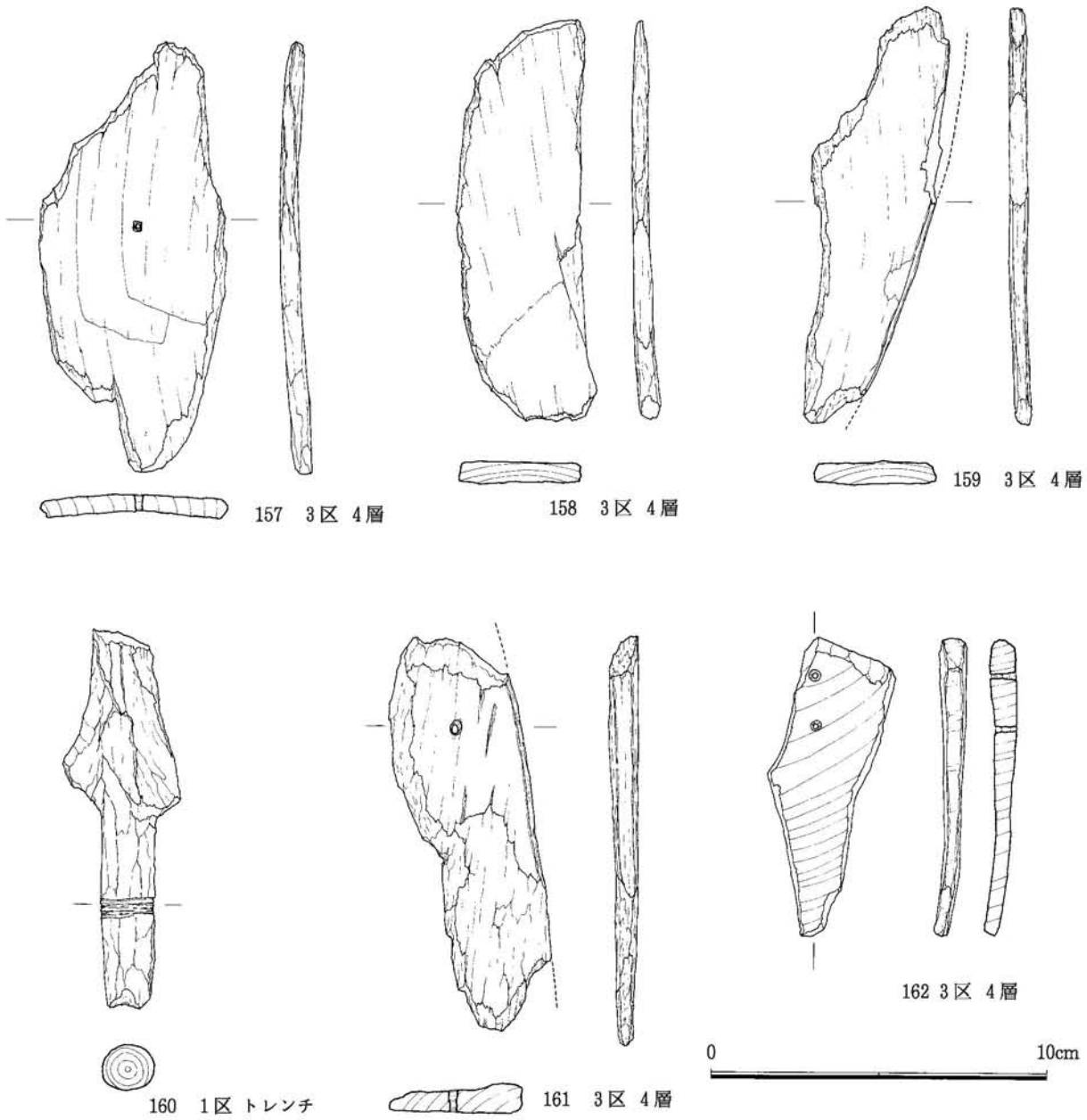


Fig. 16 出土遺物実測図12（S＝1/2）

150

152

155

158 161

157 159

151 握り部

151

151 先端

Ph. 18　出土遺物・木器

3．まとめ

以上簡単ではあるが、包含層と出土遺物についての説明を行ってきた。最後に第80次調査の簡単なまとめと今後の調査における問題点の指摘を行いたい。

第80次調査地点は比恵遺跡群北端部の小規模な谷地形の中程に位置しており、谷内部には谷周囲の展開する集落から廃棄された弥生時代前期の遺物を含む包含層が形成される。調査区の位置が谷中央部に近いため、周辺の調査では谷の落ち際の斜面上で竪穴住居や貯蔵穴・貯木施設などの遺構が検出されているが、本調査区では遺構の検出はなかった。形成される包含層は他の調査区に比べ薄く、予想されたよりも遺物の出土は少なかった。

調査から得られた成果と周辺の調査成果から、弥生時代の比恵遺跡群北端部の地形とその利用形態について次の二点が推測できる。

（1）調査区の位置する谷は、北側に開口する幅30～40m、奥行き100m前後で面積は約500㎡程度の小規模なもので開口部方向へと緩く傾斜し低湿地へ続いている。谷周囲の丘陵上に位置する調査区では、竪穴住居などの遺構群が鳥栖ローム層上面で検出され、遺構面の標高は4.6m前後を測る。対して本調査区で検出される谷の基底部となる八女粘土層上面の標高は3.00～3.10m前後を測ることから、集落と谷底面との比高差は1.5m前後で、浅く平坦な谷であったことが分かる。谷頭から谷西側斜面に位置する第24・25次調査地点では、斜面上に貯蔵穴や貯木施設が検出されており、この谷の汀線際は集落内の水場・作業場として、また各調査で検出される包含層から谷内部は廃棄場所としても使用されていたことが分かる。

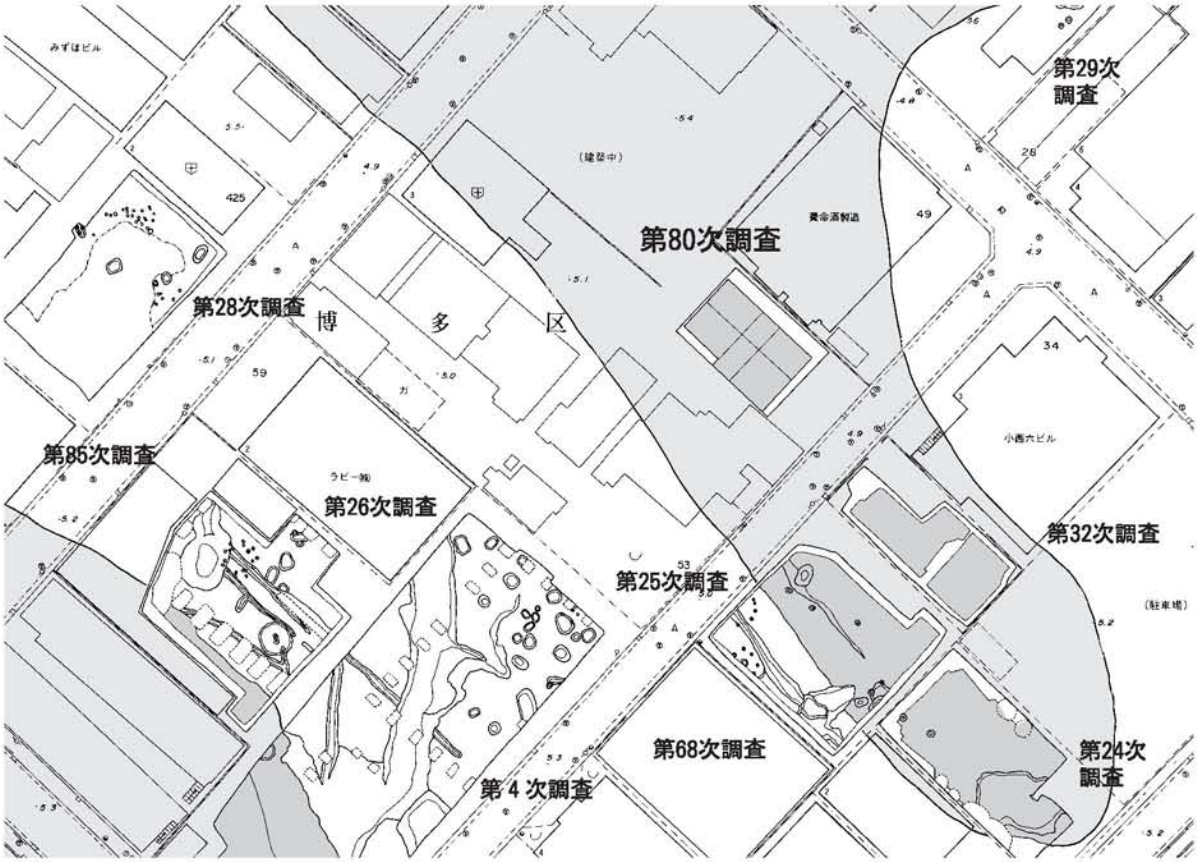
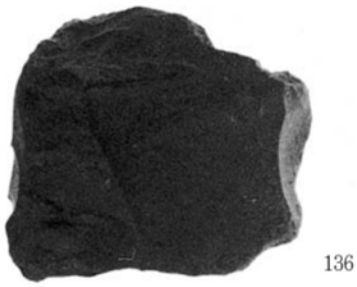


Fig. 17　調査区周辺図（S＝1/1000）　※アミ部は谷地形を示す。

（2）調査では水田遺構の可能性が考えられる層位が検出されるが、流木や遺物が土層中に埋没しており、弥生時代前期に水田として使用されたとは考えにくい。また水利的にも谷頭方向に向けて勾配を持ち、河川の流入がなく導水路などの灌漑施設を必要とすることから、本調査地点の位置する谷内部では水田は営まれなかったと判断したい。近接する比恵遺跡第4次調査で検出された弥生時代前期の水田は帯状に区画され、一枚あたりの面積も小規模で灌漑施設を伴わないことが知られている。これらのことから水田遺構は谷内部ではなく、比較的水利の管理が容易である丘陵北側の低湿地に接する箇所付近に存在するものと考えられる。

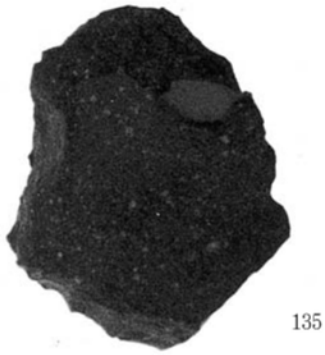
遺物では破損した石斧と石斧未製品などが数点出土しており、集落内で石器製作が行われていたことが推測され、該期の石器流通の経路・形態について貴重な資料を得ることができたことが成果としてあげられる。



Ph. 19　出土遺物

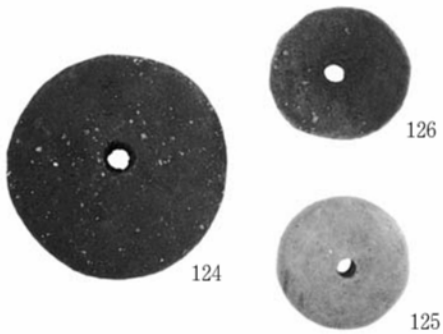
Ph. 20　出土遺物

Ph. 21　出土遺物



Ph. 22　出土遺物

Ph. 23　出土遺物



Ph. 24　出土遺物

報告書抄録

書　　名	比恵36　ひえ36		
副　書　名	比恵遺跡群第80次調査報告		
巻　　次			
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書		
シリーズ番号	第822集		
編集者名	本田浩二郎		
発行機関	福岡市教育委員会		
所　在　地	〒810-8621 福岡市中央区天神1-8-1　TEL092-711-4667		
発行年月日	2004(平成16)年3月31日		
調査期間	2002.09.24～2002.11.22		
調査面積	206.25㎡		
調査原因	共同住宅建設		
所収遺跡名	比恵遺跡群　ひえいせきぐん		
所　在　地	福岡県福岡市博多区博多駅南三丁目50番地		
市町村コード	40132	遺跡番号	0127
北　　緯	33°34′44″	東　　経	130°25′36″
種　　別	集　落	主な時代	弥　生
主な遺構	包含層		
主な遺物	弥生土器・石器・木器・木製品		
特記事項			

・経緯度数値は日本測地系による

比恵36
福岡市埋蔵文化財調査報告書第822集
比恵遺跡第80次調査報告書
2004年3月31日発行
発行　福岡市教育委員会
印刷　タイム社印刷株式会社